

留学にいたるまで

高瀬 智子

はじめに

「留学したい」と頭の中で考えることは誰にでもあるだろう。しかし、どう実現するかという段階になると経済的問題、あるいは将来への不安等からなかなか一歩を踏み出せない場合も多い。「留学」は私にとってもやはり、叶いそうにない漠然とした夢でしかなかった。ある日一歩を踏み出すまでは。

1. 第一歩：奨学生募集要項発見…応募

はじめの一歩は、私の場合、大学構内でロータリー財団の奨学生募集要項を偶然目にした時に踏み出された。1997年1月のことである。

前年の秋、仏語教育の教員免許取得のための実習を終えたばかりの私にとって、留学は単なる夢からある種の必然性を帯びたものになっていた。そこで、応募の締切日は差し迫っていたが、早速財団に連絡をとり、書類を作成した。以下にまず、奨学金取得までの道のりを簡単にではあるが、日を追って記してみたい。

- 1997年1月 ロータリー財団に連絡をとり、応募用書類を取り寄せる。
 応募書類を地区のロータリークラブに提出。
- 2月 書類審査合格の後、第一次試験（日本人審査員との面接）
- 3月 第二次試験（留学国の試験官との面接）
 第三次試験（10人の他の奨学候補生とのディスカッション）
 留学先で登録する大学をフランス大使館文化部、駒場東大前の
 留学生会館内の資料室等で探す。
- 4月奨学生試験合格通知。ロータリー財団国際親善奨学金申請

書を作成。

(この書類には留学の動機、登録を希望する大学とその選択の理由、日本の大学の教授3人の推薦状、履歴書、大学の卒業証明書、成績証明書、大学院の成績証明書、各書類の仏語訳が含まれる。)

この申請書の仏語訳作成には以前にフランスの大学に留学していた先生がご協力下さり、書式、用語についての資料を提供していただいたので非常に助かった。また、留学の動機を記した小論文、推薦状については色々な先生方のご指導、ご協力をいただいた。奨学生として合格通知はうけたものの、志望する大学に登録が可能かどうかはまた別の問題で、希望を申請するにも規定が課されていた——志望大学は5校挙げられるが同一の国からは2校まで、というものである。フランスに関しては、大使館以外にも色々な情報源があり、また、既に留学を経験なさった方もまわりにいらしたので比較的簡単に必要な情報を得ることができたが、他のフランス語圏の大学情報を集めるのには少々戸惑った。結局、スイス、カナダ、ベルギーの大使館に足を運び、資料を閲覧させていただいた。この時点での志望校は、1. パリ第三大学、2. グルノーブル第三大学、3. ローザンヌ大学、4. ルーヴァン・カトリック大学、5. ケベック大学モントリオール校であった。この5校の中から、ロータリー財団側から指定校が決定されることとなっていたが、通知は数か月後、世界中の留学希望生の行き先のバランスを考慮した上で行なわれるということで、その間に、留学生側では各校に問い合わせ、登録に関する資料を請求しなければならないというなかなか複雑な手続きがあった。私の場合、奨学金が支給される2年間、留学校は変更できないという条件とフランス演劇、及びフランス語教育に関する研究をしたいという希望があったため、もし、第二希望までに通らなければあまり留学の意味はないのではないかと考えたりもした。そこで、とりあえずこの2校に資料を請求し、財団からの通知を待つことにした。

これと併行して、4月から成城大学文芸学部のフランス語を経験豊富な先生とペアで受け持たせていただくことになり、色々なご指導を受けつつ、フランス語を教える上でのさまざまな問題点、自分の力の足りなさを実感した。夏季

休暇には、既に前年から玉川大学で非常勤をなさっている先輩に誘われて、志賀高原で行なわれる仏語教員のための研修に参加。この研修の修了者は翌年の夏、フランス現地での研修参加の可能性もあるということで12日間のハードスケジュールを先輩に励まされながら無事乗り越えた。初め、奨学金の申し込みを行なった時点では、実際の留学までに1年以上の時間があることになにかもどかしさを感じていたが、現時点から見ると、この時期に、私の中で色々な問題点が明確になっていったように思われる。特に、学ぶことと、教えることを同時に経験できたという点で、非常に貴重な時間であった。

2. 第二步：方向を定める

以下に、その後財団の通知を受けてから、現在私の在籍するパリ第三大学への登録までの経過とその時々感じたさまざまなことをひきつづき記してみよう。

10月 ロータリー財団から、私が申請した2年間の奨学金支給の金額証明と、指定校通知が届いた。この時点での指定校は、グルノーブル第三大学であった。

グルノーブル第三大学は第二希望の大学である。確かに悪くはなかった。この大学にはフランス語教授法に関する優れたプログラムがあるので志望校として選んだものの、フランス演劇について学ぶには、やはりパリの方が望ましいと思った。2年間という時間を最大限に活かすには...と色々考えた末、財団側に、指定校を変更していただけないかという手紙を書いてみることにした。無論、数か月をかけて財団側が結論したことを変えるなど不可能に違いないとも考えたが...とにかく私にとってフランスで演劇の研究を行なうことの意味、グルノーブルとパリの劇場数(グルノーブル:7, パリ:150以上)と演劇活動の活発さや資料の豊富さの違い、パリ第三大学は演劇と語学教育について同時に学べるフランスでほとんど唯一の機関であること等、思いつく全てを書いた。返事はすぐに来た。「あなたの研究に対する熱意は充分に分かりますが、その大学の教授の指導許可の手紙がない限り、ご希望におこたえすることはできません

ん。」という内容であった。1997年、12月のことである。

1998年1月 パリ第三大学に依頼していた演劇研究所のDEAの年間プログラムが届く。(DEA：フランス大学教育システムの第三課程1年目。日本での修士号取得がアクセスの条件。この課程の修了が博士論文を執筆するための資格となっている)

プログラム依頼の時期が早すぎたようで、私の手元に届いたのは、前年度のものであったが、これを頼りに、「演劇と教育」という専門分野が名前の横に書かれている教授に手紙を出し、指導を直接お願いしてみることにした。留学マニュアルを見つつ、単語だけを入れ替えて、なんとか書いた手紙を送ってみたが、返事は2月末を過ぎても来なかった。今考えてみれば、2月は、パリの大学の冬休みの時期で、先生方は秋から始まった前期のテストの採点やレポートの評価に追われている頃に当たり、事務局には色々な書類が溢れているのを目にしているから、日本からの手紙が一通、どこかに紛れ込んでしまっても不思議はないと納得がいく。しかし、当時の私はこの返事が来なかったことに落胆した。

3月 成城大学で5月に行なわれるフランス語フランス文学会の準備が少しずつ始まっていた。その準備を大学院生としてお手伝いさせていただくことになり、準備の会合を終えたある日、先生方とお茶をのんでいた時のことである。私は留学先が未だに決定しないことと教授に出した手紙の返事が来ないことへの不安を、偶然となりいらしたある先生にお話した。その先生の返答は非常に明快なものであった。「現地に行くのが一番早いでしょう。」その通りだと思った。そして、それを実行してやることにした。早速飛行機の予約をして、4月の第一週、日本の大学の新年度開始の前にパリに滞在し、何人かの教授にコンタクトできるか頑張ってみよう、と決心した。

再び留学マニュアルの助けを借りつつ手紙を書き、内容が指導を依頼している手紙だということがきちんと伝わるかを、研究室にいらした先生方をつかまえて、読んでいただいた。3月27日のことである。この手紙に履歴書を添え、パリ第三大学で教鞭をとっていらっしゃる3人の先生あてに大学事務局にファックスで送信した。1人に送って断られてはいけないと思い、3人に送ってしまったが、その後、もし、この3人の先生方がライバルのような関係にあつたら...などと想像し不安になった。2日としないうちに全ての先生から返事が届いた。少々失礼とは思ったが、手紙の中で、パリに滞在できるのは4月の第一週目のみであることを強調したことも効果があったのだろうか、3人の先生はそれぞれ約束の日時をファックスで送ってくださった。

3. 第三步：指導教授を見つける

4月2日～9日 パリの友人宅に滞在させてもらいながら指導教授を探す。

東京で買ったちょっとしたおみやげと、先生に自分のしていきたい研究について話すためのメモを握り締め、最初の約束の時間、約束の場所に着いた。その日は雨で、パリの外れにあるというその先生の書斎を見付けるには少し時間がかかった。ボタンを押して、アパルトマンの扉を開けると、誰かが立っていた。「きっと管理人さんだ」「あ、...先生のお宅はこちらですか？」モロッコ系のフランス人であるその先生の名前をどう発音するのかその頃の私には分からなかった。「私だよ、私。」以前この教授の著書を読んだときの印象からは程遠い小柄で気さくな方だった。「君が来る頃だと思って、窓から見ていたんだよ」この教授は私のたどたどしいフランス語の説明を辛抱強く聞いて下さり、フランスの大学の第三課程のしくみ等について色々アドバイス下さったが、最終的には、彼はもう今年で定年なので公式な指導教授にはなれないということだった。また、私が用意していった研究テーマに関して、「その劇作家はフランスでは研究し尽くされているので DEA の論文に関しては方向性を変えた方がよい」とはっきりしたご意見も下さった。この先生とのほんの30分ほどの出会い、「研究」はある「成果」をとまなうものでなければならないという考えて

みれば当然のことをもう一度お腹の底で理解させてくれた。なるほどと思いながらアパルトマンを出て、次の約束もこんなふうに断られるのだろうか等と考えつつ、雨上りの道を照らす夕日のまぶしさに我に返った。「おみやげ、渡すの、忘れた...」

翌日、翌々日、他の 2 人の先生とは、パリ第三大学の演劇研究所内でお会いすることになっていたが思わしくない予感的中した。この 2 人にも指導は引き受けていただけなかった。1 人は助教授であるために博士論文まで続けて指導できないという理由で。3 人目の教授は、はっきり、「君の今のフランス語力からいって、1~2 年でこれまでの研究を網羅して新たな成果をだすのは難しい」とおっしゃった。日本で、フランスのある現代演劇作家の劇構造の研究をしていた私は、もしこの研究が続けられなくても「演劇と教育」というテーマなら新しい研究の分野を開拓できるのではないかと安易に考えていたので、この分野の専門家である 3 人目の教授の言葉は痛かった。だがこれで最後のチャンスだと思い、3 日後までにパリ第三大学の図書館で資料に目を通し、もう一度会っていただく約束をした。そして、まさかの時のために用意した、18 世紀、フランス大革命下の演劇というテーマについて詳しい教授のお名前を伺い、その教授とお会いできるよう、事務局で予約をした。廊下に出た。何かが喉につまって泣きたいような気分になった。

結局この 4 人目の教授が現在私の指導教授を引き受けてくださっているマルティヌ・ド・ルージュモン先生である。初めの 3 人の先生との話から自分がフランスでの様々な研究の進み具合についてほとんど無知であることを自覚していたので、私はこの 18 世紀に関するテーマについて興味を抱いた経緯を正直に話してみることにした。すると、先生は、あっさり、「面白いじゃない、やってみなさい」と一言。指導を引き受けてくださった。やっとの思いで研究室を出た私は、また“おみやげ”をリュックに入れたままであることに気づいた。そして、肝心の指導許可の手紙を書いていただくことも完璧に忘れていた。4 月 8 日、3 日前にきっぱりと指導を断られた先生との約束の日である。図書館でこの教授の書かれた雑誌記事を読んだ私は、「演劇と教育」というテーマはフランス

では既に60年代後半から盛んになっていて、現在もかなりのスピードで色々な研究が進んでいることを理解した。この先生にそれを正直に話し、また、ルージュモン先生に指導を引受けていただいたことを報告した。この教授はまず見た目がスキンヘッドでかなり怖い。しかし、この日は一度目の約束の時とは様子が違っていた。私の話を黙って聞いていた彼は、先日はまったく見せなかった笑顔で、「君がくれた日本のお菓子、孫が気に入ってたよ」「グルノーブルじゃなくてパリの大学に登録するっていう手紙が必要なんじゃないの?」と教えてください、その場で手紙を書いてくださった。しかし、達筆すぎて「読めない」と思っていると、「大丈夫、少し待っていてくれたら事務局でタイプしてもらいから」とおっしゃって、その手紙を事務局へ持っていかれた。待っている間、私はこの教授の最初の約束の時の態度は、学生のやる気を試すための戦略なのだ、と思った。

こうして、私がまったく手紙を書かなかった先生が指導教授になり、一番恐ろしくて近寄りたがっていた先生がパリでの留學生活のパスポートとなる手紙を作ってくださいだったのである。(この手紙は大学への仮登録証明の代りの機能を持つ点でも重要である。)帰国後すぐにこの手紙に英文訳を添えて、ロータリー財団にファックスで送信。2週間後に指定校変更の許可がおりた。

私の場合には不可能だったが、指導教授探しについては、学会などの機会に、来日された先生に直接コンタクトをとり、お願いするという方法もあるかと思われる。一番望ましいのは、希望する指導教授の知り合いの先生に紹介していただくことではないだろうか。

4. 第四步：出発までの準備

留學先が決定して少し安心したが、今度は住居など、実際の生活について、また、健康診断証明、保険、ビザの取得などの手続きに取り掛からなければならなかった。

5月 パリ国際大学都市日本館の居住申し込み書類提出

(書類は4月初旬にフランス語教育振興協会に問い合わせ、取り寄せた)

- 6月 健康診断を受ける（奨学金の財団で要求されたため）
日本館居住の書類審査通過通知（居住正式許可は8月であったと思う）
- 7月 前年に参加した仏語教員の研修に引き続き、カーン大学、パリでの研修
- 8月 日本に一時帰国。ビザ取得手続き。大学で新しい日付の証明書類を作る
- 9月6日 パリに向けて出発

ビザの取得手続きについて：大学の仮登録証明の出ない場合、登録する大学の指導教授の指導受諾の手紙が重要な書類となる。この手紙には、3ヵ月以上の留学期間が明記されていることが条件の一つとなるので注意しなければならない。また、私の場合、教授が丁寧な表現として用いてくださった条件法の一文が、大使館の書類審査官によって、推量の意味に解釈されてしまい、（この表現では私がこの大学に登録するかどうか明確でないのであらたな手紙を提出せよという通知があった）結局、4月にパリに行った時、大学の図書館使用許可のために先生が書いてくださった小さなメモを添えて再度提出しようやくビザが降りた。最近学生を装って働く日本人が増えていることに、大使館も警戒を強めているのかもしれない。

5. 第五歩：大学への本登録、授業、生活

9月15日 パリ第三大学への本登録を行なう。研究計画書（2～4ページ）、参考文献リストの他に、日本の大学で取得した修士号がDEAアクセスの条件として認定されるかを審査にかけるため、修士課程の修了証及び、成績証明、修士論文の仏語レジュメ、戸籍抄本を提出。これら一連の書類は“DOSSIERS D'EQUIVALENCE”と呼ばれている。この“EQUIVALENCE”が認められると、今度は語学試験を受けるようにという手紙が届く。

10月 外国人学生のためのフランス語テスト

このテストの結果によって、DEA 課程に直接登録するか、登録しつつ語学講座も受けるか、語学講座のみの準備年に登録するかが決定される

内容は、短い講義のレジюмеと、コモンテール・ド・テキストで、試験実施時間は6時間とかなり大がかりなものであった。

11月 DEA の共通講義及び、セミナー開始。不思議だが、フランス語テストの結果掲示の日付は、講義の開始後に設定されていた。登録時のオリエンテーションで、「合格の通知がなくても、必ず講義には出席するように」と説明があった。また、外国人、社会人の学生については、普通1年で修了するこの課程を2年かけて終えることも可能ということであった。そこで、私は1年目に必要単位(共通講義1つとセミナー2つ)を履修し、2年目の論文執筆に備えることにした。11月半ば、ようやくテストの結果が分かる。結局予告されていたような掲示はなかった。学生証を持って滞在許可証の申請に行く。

DEA の論文のテーマが最終的に「18世紀フランス大革命下の演劇」になったことは既に述べた。決定当初は、これまでとは異なるタイプの研究をゼロから始めなければならないことに負担を覚えたが、テーマ、時代区分が変わったことは、反って研究に対する姿勢、分析の方法などについて見直し、視野を広げる機会となった。

「演劇と教育」という分野に関しては、DEA 課程とは別に、学部(Licence)のプログラムでこのテーマを扱うアトリエに出席したり、パリ郊外の劇場に足を運んで様々な舞台作品を観たりする中から研究材料を集めてみることにした。

12月 滞在許可証取得。ようやく自分の居場所が確保された気分になる。

指導教授のセミナーでエクスポゼを行なう。緊張のあまり翌日寝込む。

指導教授の先生と研究のための初めての話し合い。以前に提出した参考文献リストの資料は少し古いので 1995 年にかかれた博士論文(2 巻、800 ページ)を読んで文献を見なおすようにという指導。気が遠くなる。

こうして私の留学生生活が始まった。授業についていくのは確かに大変であったが、カセットテープに録音したり友人の貸してくれる暗号のならばノートを解読したりしつつ自分に理解できることを切り口に少しずつ理解の幅を広げていくよう努めた(本誌に掲載される仏文の論文は、そうして理解されたことから自分なりの視点を展開しようとしたものである)。外国語で考えて外国語で書く時にはいつでも自分の理想と現実の差に悩まされるのは当然のことと思われる。しかし、フランスでのそういったある意味では苦しいとも言える経験は、私に自分の位置を正しく計ることの大切さを実感させてくれた。今どこにいるかが分かれば、次の目標が定められるのである。

ただ、日本の大学にいた時、フランス語で文章を書くための努力を怠っていたことを、初め少し後悔した。もし、これからフランスの大学に留学しようと考えている学生がいたら、日本にいるうちから少しでもフランス語で書く習慣をつけておくとよいと思われる。ノートをとるための略記号等も知っておいて無駄にはならないだろう(dans ds, information info^o etc.).

住居に関しては、私は外国で生活した経験もなかったので、安全性と情報収集のエネルギーの節約のために現在の寮を選んだ。慣れない生活や滞在許可証申請など、事務手続き上の問題からくる小さなストレスは、誰かに一言話すだけで十分に軽くなるものであると私は個人的に実感している。

無論、こういうところにおいてはフランス社会に溶け込むことはできない、という考えも当然あるが、限られた期間、勉学という目的で滞在する場合、ある選択を強いられるのはやむを得ないだろう。それでもこの寮に入って良かったといえるのは、様々な国の学生が迷いながらも常に自分の夢に向かって生きている姿に毎日出会えるからである。それぞれ目的は違っても、皆がともに努力しているのだと思うことは、大きな支えになる。

おわりに

いつも前に向かって進むことばかりを考えているフランスでの生活の中で、現在に至るまでの道のりを振り返り日記のようなものを記すのは、私にとっては簡単なことではなかった。何かの役に立てばと思って書き始めた日記であるが、何か役に立つようなことはあまり記すことができなかつたように思われる。しかし、この日記をつけてみて、留学が実現するまでに、先生方、家族、友人等、たくさんの方々が色々なかたちで私を応援して下さったことが思い起こされた。この場をかりてあらためてお礼を申し上げたい。

留学には人それぞれ違う目的があるのが当然であるからこの日記は“マニュアル”にはなりえない。けれども、もし、今、留学への夢を抱きつつも一歩を踏み出せずにいる学生がいるなら、ここに記されたものが彼、あるいは彼女の背中を押し、少しでも前進できる助けとなれば幸いである。

A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の
機関誌『AZUR』第1号(2000年3月発行)に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises
de l'Université Seijo

http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html